

I 序 説

1. はじめに

宇土城跡（城山）は、熊本県宇土市古城町・神馬町に所在する近世初頭の城郭である。

城跡は、市街地の南西端に位置しており、史跡を利用した公園化の計画がなされた。昭和54年7月に公園整備事業が認可されたため、教育委員会では、工事に先立つ事前の確認調査を5ヶ年計画で、昭和55年度から実施している。今回の調査は、継続事業の2年目に当たり、本丸跡の調査は、昭和53年度に行なった調査を含め第3次になる。

発掘調査は、国庫補助を受け、昭和56年6月15日から11月30日まで実施した。

今回の調査は、昨年の調査で新旧二時期の城郭遺構の存在を確認しており、さらに、下層には、弥生、古墳、中世の各時代の遺物包含層も在るが、調査後も、保存が可能なため、最も新しい遺構の調査にとどめた。調査は、本丸2ヶ所、内堀7ヶ所の調査区を設定し、発掘を行なった。

調査期間

本丸 A-T 8'、A-T 11 昭和56年6月15日～9月8日

内堀 B-T 4～B-T 9 昭和56年9月9日～11月30日

調査には、多方面より協力を得、無事に終えることができた。機材の搬出入には、中村コンサルタント、市役所土木課の手をわずらわせた。特に、猛暑の中の作業や水につかった作業にも協力的であった地元作業員の方々をはじめ、調査関係者に対し心から感謝の意を表したい。

2. 調査の組織（昭和56年度）

調 査 主 体	宇土市教育委員会
教 育 長	船 田 至
社会教育課長	山 村 茂
文 化 係 長	一 宗 雄
事 務 担 当	内 田 憲 子 高 木 恭 二
調 査 担 当	平 山 修 一 木 下 洋 介
調 査 指 導	富 樫 卯三郎（前肥後考古学会会長） 井 上 正（前宇土市文化財専門委員長） 椎 葉 昌 美（熊本県立宇土高等学校教諭） 大 田 幸 博（熊本県教育委員会文化課技師）
調 査 協 力	山 羽 シマ子 上 野 ナツエ 宮 田 ハルエ 村 田 イ ネ 荒 川 昭 子 飯 田 ミ 子

杉 本 エミ子 橋 本 順 子 飯 田 富 子
 井 上 頼 子 (地元作業員)
 山 神 孝 弘 内 田 哲 朗 宮 川 栄 助
 宮 本 恵 吾 谷 口 茂 (熊本商科大学学生)
 古 城 史 雄 松 尾 法 博 渡 辺 千 恵
 平 井 利 枝 武 内 由起子 (熊本大学学生)
 沢 宮 優 橋 本 重 信 元 松 茂 樹
 山 本 弥 森 下 浩 行 津志田 幸 紀
 守 田 賢 一 木 村 洋 一 上 塚 智 子
 山 口 美 和 平 島 雅 子 中 山 みゆき
 高 木 亮 子 北 原 恵 (熊本県立宇土高等学校社会部部員)
 勢 田 広 行 (文化財保存計画協会研究員)
 安 達 武 敏 (宇土城三の丸跡調査団調査主任)
 河 北 毅 (宇土城三の丸跡調査団調査員)
 中村コンサルタント
 鏡 建 設
 東洋航空事業株式会社
 宇土市役所都市計画課・土木課 (敬称略)

3. 発掘調査の経過 (抜粋)

- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|
| 6・15 現場事務所の設置。 | 18 A-T11検出の石組排水溝の実測を
はじめる。 |
| 16 機材搬入。 | 19 石組溝に使用された石臼出土。 |
| 18 本丸東側腰曲輪の草刈り。
本丸東側腰曲輪の写真撮影。 | 20 石組溝の東コーナーを検出。 |
| 23 A-T8東側のブリッジ状に残る部
分の拡張 (A-T8')。 | 21 コーナー部より灰釉出土。 |
| 7・6 A-T8'で石垣と排水溝を検出する。 | 26 遺構の清掃と写真撮影。 |
| 9 遺構の清掃と写真撮影を行なう。 | 9・1 各調査区の実測 (～8日) |
| 13 A-T11周辺の草刈り。 | 9 ユンボを使用し石垣の確認をはじめ
る。 |
| 15 A-T11 (8×2m) を設定する。 | 10 B-T4で東西方向の石垣を確認。 |
| 21 発掘区を南へ拡張する。 | 16 B-T5で出隅 (▲F) を確認。 |
| 24 石組の排水溝を検出。 | 17 さらに西側で入隅 (■G) を確認。 |
| 8・10 A-T8'実測 (高校生合宿～14日)。 | 22 B-T6の調査をはじめる。 |

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 24 出隅(▲C)、入隅(■B)を確認。 | 石垣の清掃と写真撮影を行なう。 |
| 28 さらに北側の出隅(▲A)を確認。 | 11・11 機材撤去 |
| 29 南側に入隅(■D)を確認。 | 18 ステレオカメラ撮影のために排土を |
| 30 B-T7の調査を開始し、入隅(■J)を確認。 | 除去する。(～28日) |
| 10・1 西側に出隅(▲K)を確認。 | 24 ステレオカメラ撮影準備。 |
| 2 B-T7石垣を水面まで掘り下げる。(～20日) | 28 各石垣の撮影を行なう。(～30日) |
| 21 B-T7石垣を確認。 | 以後3月まで補足調査、遺物整理、報告書の作成を行なう。 |
| 9月22日～10月22日の間、出土した | 11・30 文化財学級で現場見学会を行なう。 |
| | 2・15 広報紙に、調査の成果を掲載する。 |

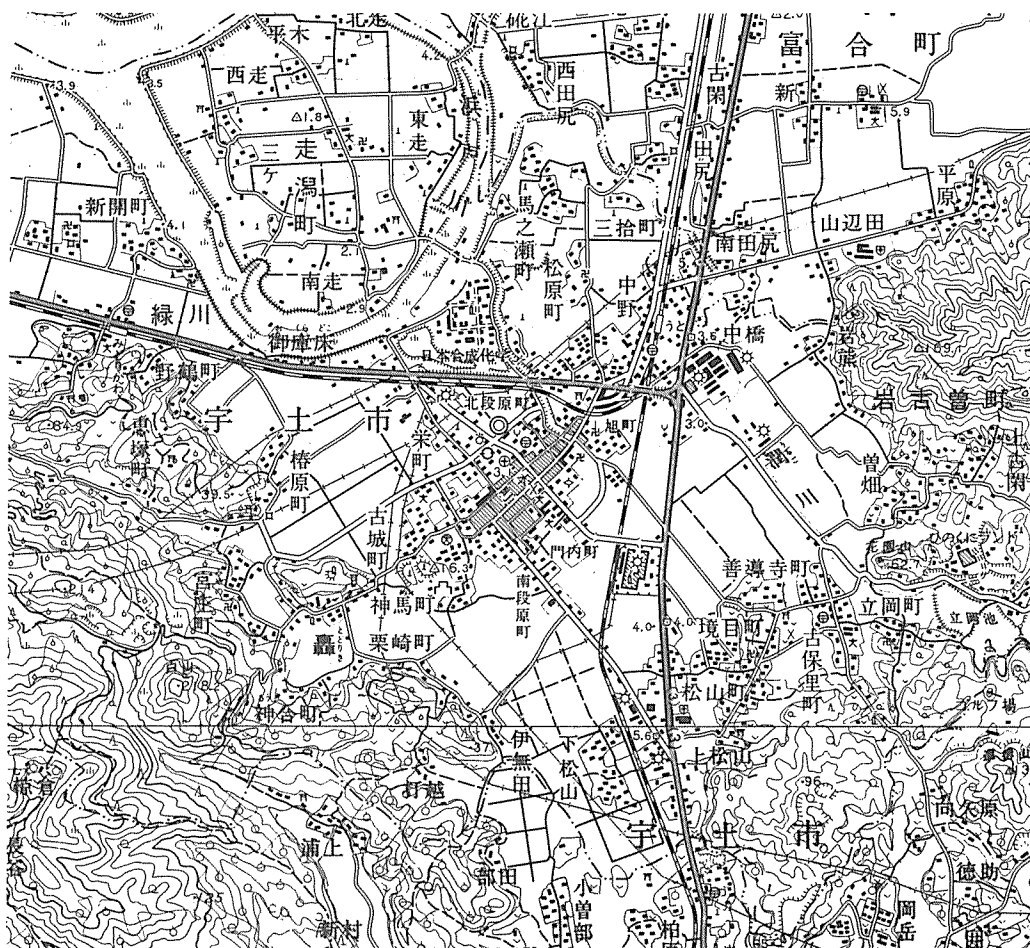


Fig 1 宇土城跡(城山)位置図(1/50,000)



0 100 m

Fig 2 守土城跡(城山)地形測量図(1/2,500)



Fig 3 トレンチ及び遺構配置図 (1/1,000)
(赤線上層期, 青線下層期)

II 本丸跡の調査概要

1. 本丸東側腰曲輪の調査

本丸跡は、一面ほぼ平坦であり、標高約16mを測るが、これを取り巻くように周辺に、1.5～2.0m低くなる腰曲輪（帯曲輪）と考えられる地域がある。特に、本丸東側の遺存がよいので、今回、草木の伐開と写真撮影を行なった。発掘調査は、53年度にB-T7トレンチで実施したが、城郭の建物等に伴う遺構の検出はなかった。

2. A-T8'の調査

昭和55年度に本丸北東部、入隅（■D）の上部にA-T8を設定し、発掘調査を実施し建物跡の遺構を検出している。今回調査したA-T8'は、この時に残された幅約1mほどのブリッジ状の地域であり、検出した遺構は建物跡の東側部分であり、排水溝と西面する石垣とこの北側で東へ折れる石垣の根石3石を確認した。過年度調査分も含め記述する。

建物跡は、周囲より約1m低く、三方向を法面に囲まれ、北に開口する長方形の凹地に位置する。これを構成する礎石6、石列・石垣5方向、排水溝1を検出した。

北辺は、東西方向5.3m、7石の割石からなる石列（SA-1）で、西端の1石を欠く、石材上面をほぼ同一レベルにそろえ、比高差30cmの1段構築である。東端で南に折れ1.5m程延び排水溝へ続く。

西辺には、南北に長く幅2m、深さ50cmの溝状の掘り込みを検出した。南端に1石のみではあるが安定した状態の石材があり、現位置を保つもので、東辺の石垣と対応する石垣が存在したことが考えられる。さらに西側には、溝底より1.8mほど高く幅3.5mの平場があり、その中央に傾いた礎石が存在し、SA-7で区切られる。

南辺は、石材使用の施設はなく、急傾斜で上面へ至る。法面下方には割石小片が東西に長く残っており、石列の存在の可能性を示す数石の一部も残存する。

東辺は、今回新たに検出した地域である。西面する南北方向の石垣（SA-4）、長さ5.0m、高さ90cm、大きめの巨石を使用する。裏込めは、すでに崩壊・流出している。南は溝状の掘り込みだけを残し、南端まで延びると考えられ全長8mを測る。SA-4の北端で直角に折れ北面するSA-5は、隅石を含め3個の根石が、B-T6-e石垣と平行する。またこれらに沿って、長さ5.2m、幅26cm、深さ30cmの石組の排水溝がある。

礎石は、北側4、南側2を確認、北側100×80cmの大きさに2石が接する。扉部分の柱間3.32mを測る。南側は、控柱の礎石で、柱間2.7mを測る。N2、N3、それぞれに対する控柱は当初からなく、N4のものは現存しない。S5は125cm高いレベル差があるが、同一建物の礎石で

ある。

S A - 1 の東端北側の割石は、東方へ下る石段の最上段と思われる。

3. A - T 11 の調査

本調査区は、本丸南西に位置し、耕作土を剥ぐとすぐ遺構面に至る。検出した遺構は、東西方向の石組溝である。方位は、N - 77° - E を示し、全長 18.7m を測る。溝の作りは一様ではなく中央で東西の特徴を二分する。東側は、幅 90cm、深さ 80cm を測り、側壁南は 40 ~ 60cm 大の河原石を 2 ~ 4 段積む。東コーナー部の一部には石臼片を使用する。北壁は雑然と河原石、角礫、五輪塔の一部が集在する。溝は中央部で幅 25cm と狭くなる。西側部分は両壁とも小ぶりの角礫を 4 ~ 5 段積み上げ幅 40 ~ 55cm、深さ 70cm を測る。底には偏平な敷石を密に敷き西方の内堀へ向かって低くなる。2ヶ所に橋状の施設を設け、1号幅 1.7m、2号幅 0.95m を測る。

この排水溝は、内堀（B - T 7 - a 石垣）とほぼ直角の位置にある。

ある。

S A - 1 の東端北側の割石は、東方へ下る石段の最上段と思われる。

3. A - T 11 の調査

本調査区は、本丸南西に位置し、耕作土を剥ぐとすぐ遺構面に至る。検出した遺構は、東西方向の石組溝である。方位は、N - 77° - E を示し、全長 18.7m を測る。溝の作りは一様ではなく中央で東西の特徴を二分する。東側は、幅 90cm、深さ 80cm を測り、側壁南は 40 ~ 60cm 大の河原石を 2 ~ 4 段積む。東コーナー部の一部には石臼片を使用する。北壁は雑然と河原石、角礫、五輪塔の一部が集在する。溝は中央部で幅 25cm と狭くなる。西側部分は両壁とも小ぶりの角礫を 4 ~ 5 段積み上げ幅 40 ~ 55cm、深さ 70cm を測る。底には扁平な敷石を密に敷き西方の内堀へ向かって低くなる。2ヶ所に橋状の施設を設け、1号幅 1.7m、2号幅 0.95m を測る。

この排水溝は、内堀（B - T 7 - a 石垣）とほぼ直角の位置にある。

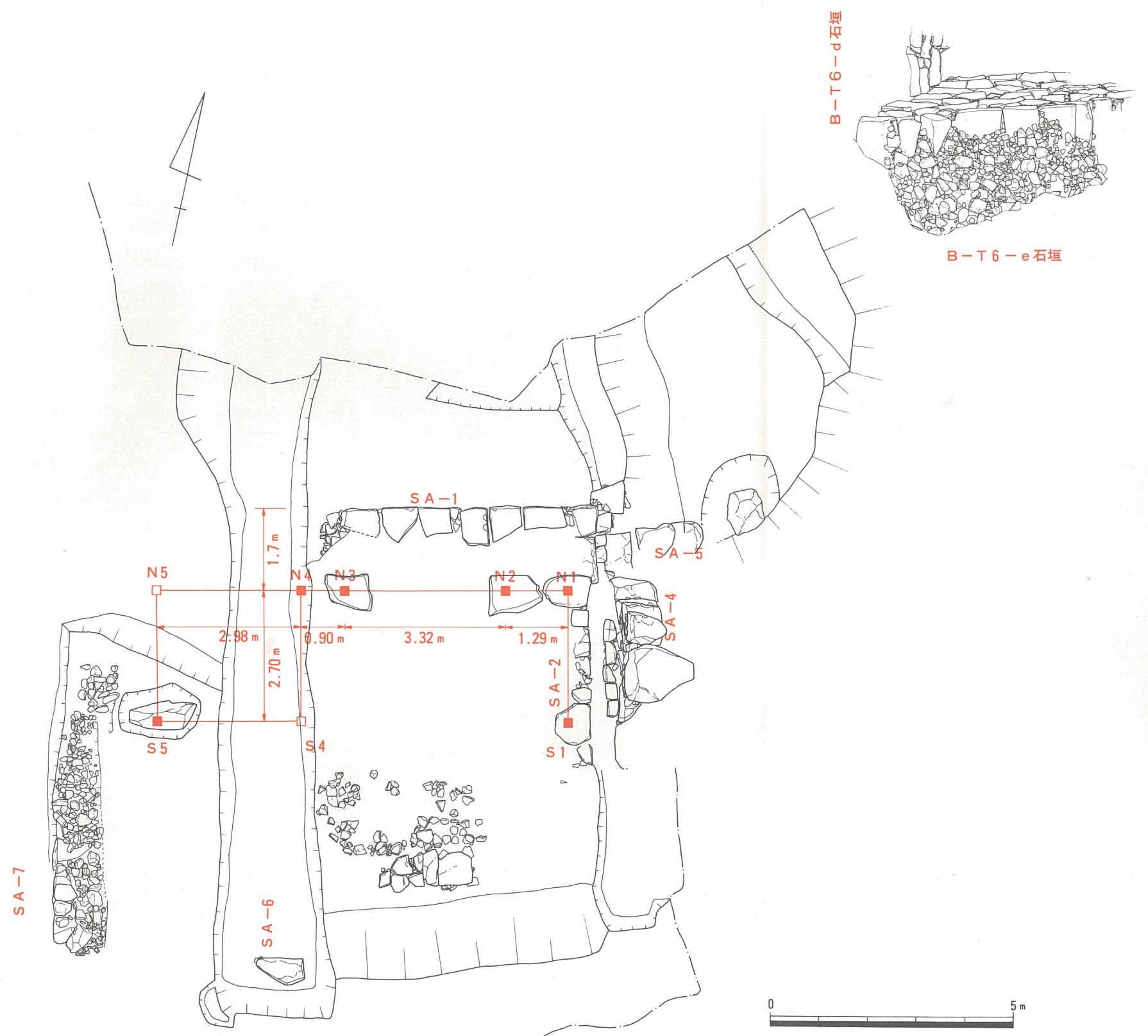


Fig 4 A-T8' 検出建物跡実測図 (1/100)

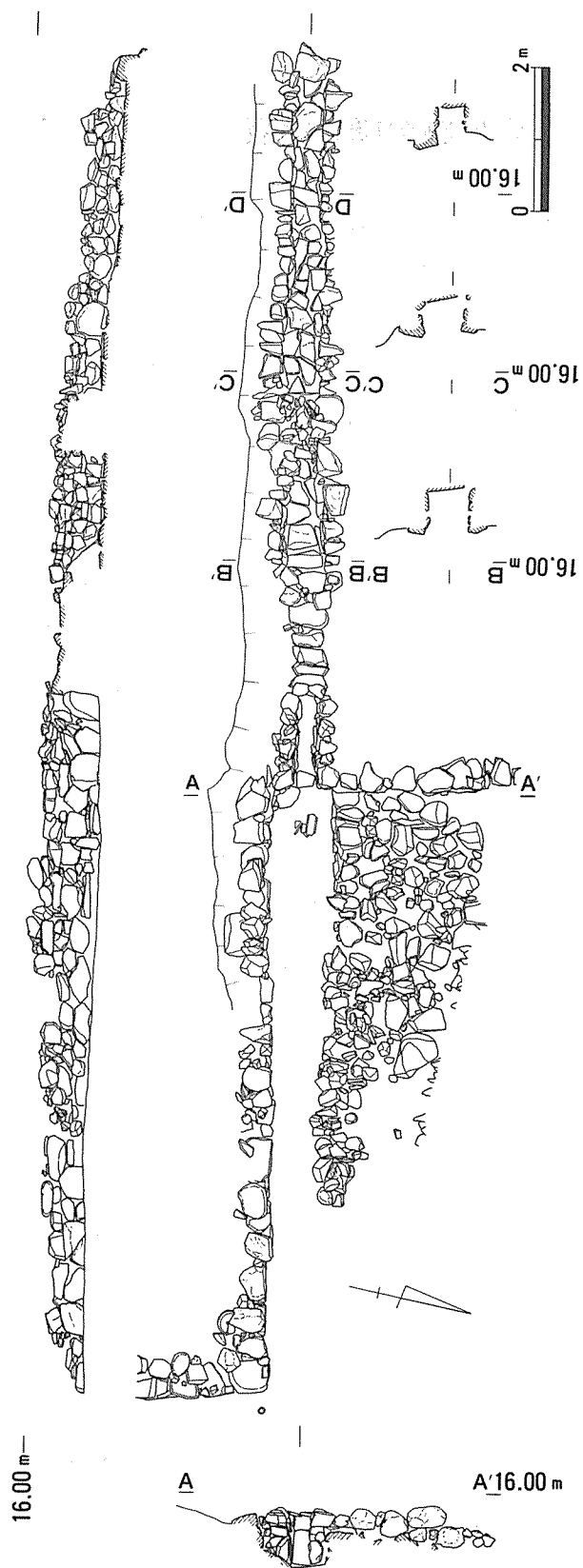


Fig 5 A—T11檢出排水溝實測圖 (1/100)

III 内堀跡の調査概要

内堀の調査は、昭和53年度の調査時にB-T1～B-T3、昭和55年9月に熊本県教育委員会文化課の調査で出隅(▲E)と内堀外縁の調査が行なわれ、本丸北東の一部が明らかになっていた。

今年度は、本丸石垣の平面形の確認のために、可能な限り、広い範囲の調査を行なった。発掘作業には、重機を用いたために、細部について把握できない点も多々あるが、これらの概要を以下述べることにする。

1. B-T4の調査

本調査区は、本丸南側ほぼ中央の内堀に位置する。石垣は、東西方向長さ約9.5m、標高7.0～8.9mの間約2mを検出した。石垣は、N-83.0°-Wで南面しており傾斜角63°を測る。打込ハギで築かれ、検出した高さ約2mの面は5段の石積みで成っている。ハラミはほとんどない。

石垣の下部は、B-T7-a同様の断面(弓状)を呈すると推定できるが、調査区域が限定されたため、未確認である。また、上部は、現在の崖面に沿って垂直またはそれに近いところま

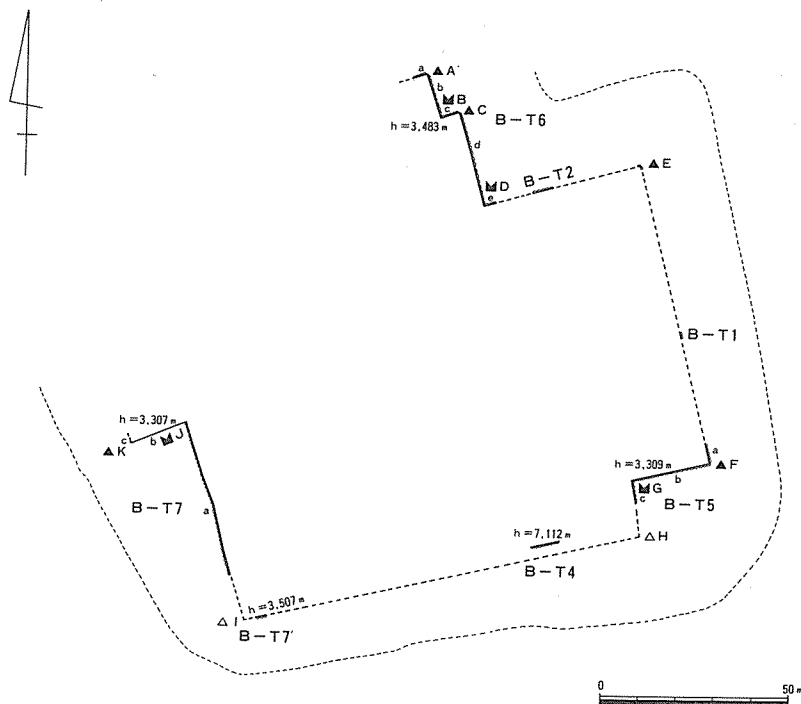


Fig 6 石垣配置図 (1/2,000)

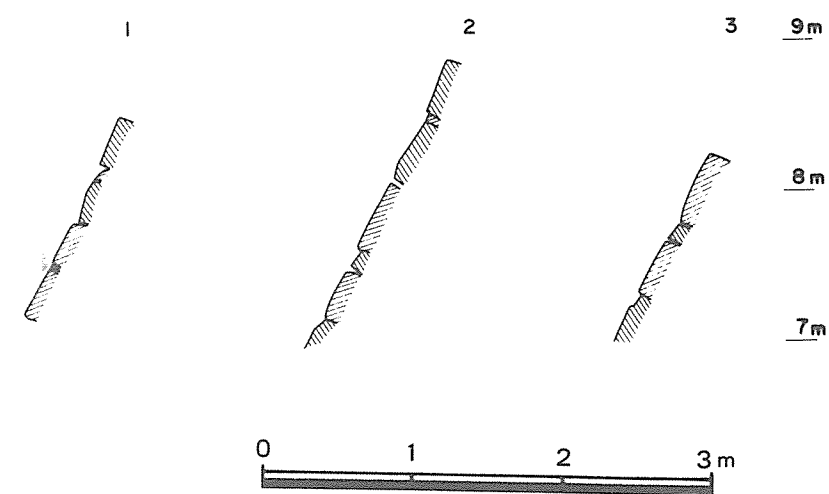
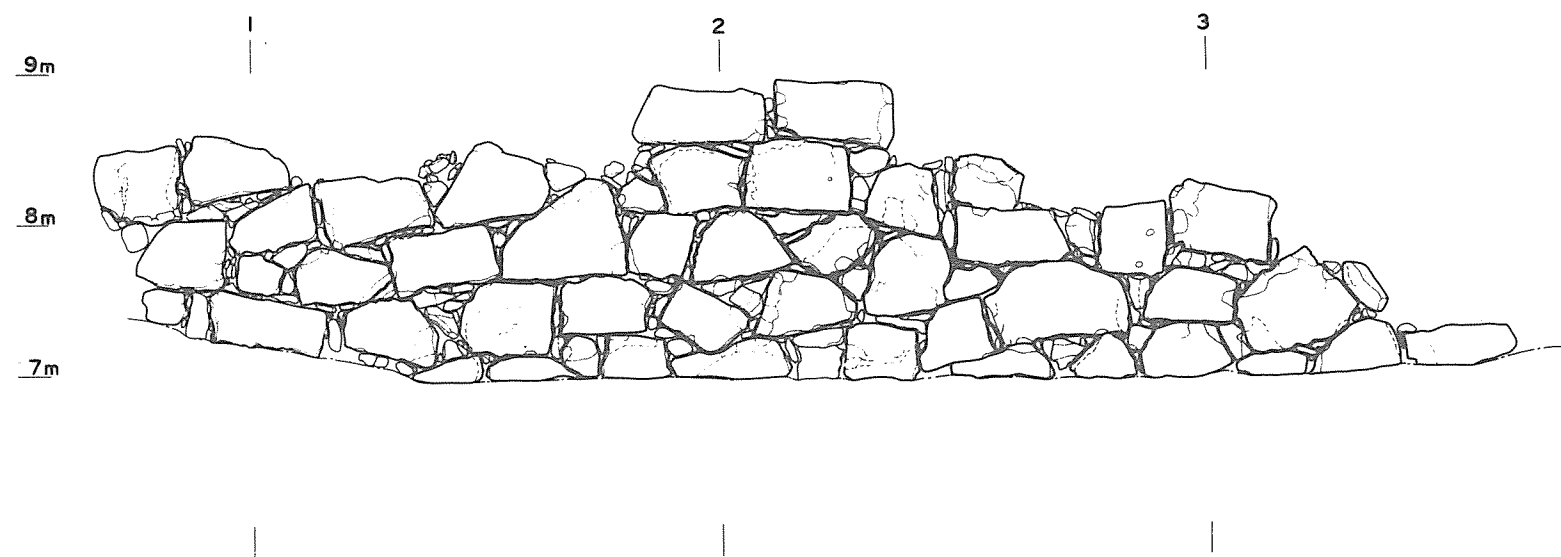


Fig 7 B-T 4 石垣実測図 (1/50)

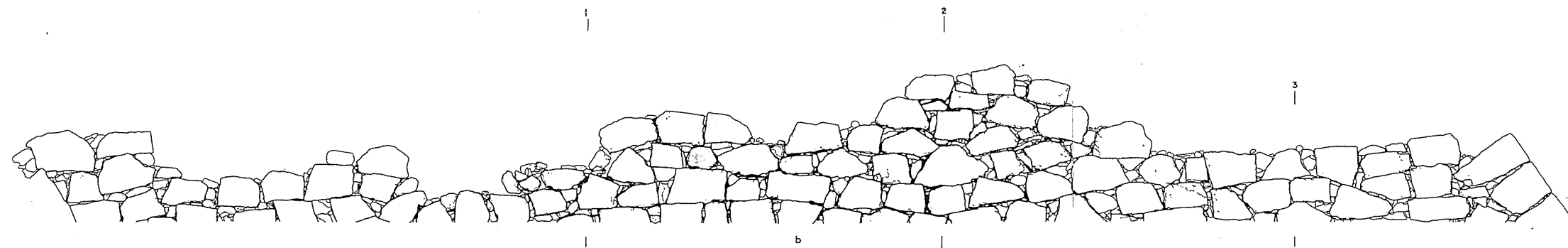
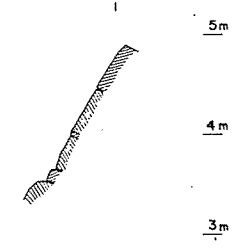
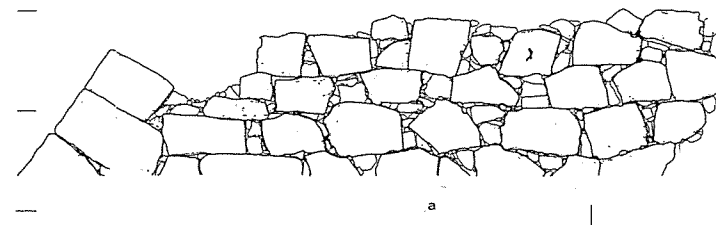
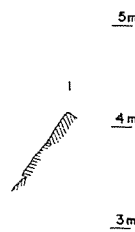
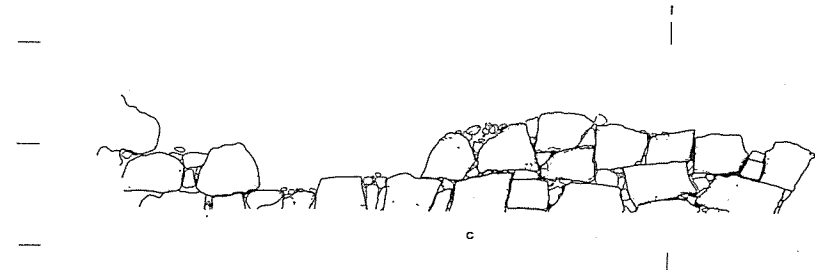
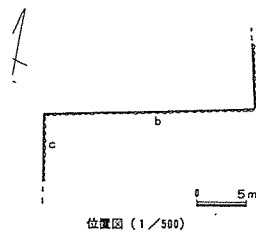
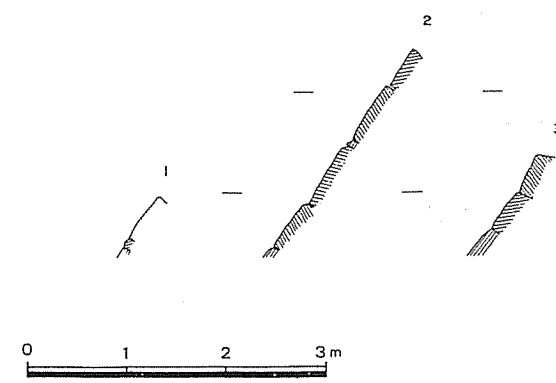


Fig8 B-T5 石垣実測図 (1/30)



で上がると思われるが、石垣の高さについては、正確な値を知るに至っていない。

石垣は、断面2を基準とし、東へ26mを測る△Hから北へ折れ、B-T5-cへ続く、また、西側は、B-T9～B-T8～B-T7'を通り△Iで北へ折れる。B-T4を一部とする△H～△Iの石垣は、何の曲折もなく、ほぼ一直線と考えられ長さ約107mを測る。対岸との堀の幅は約22mを測る。

2. B-T5の調査

本調査区は、本丸南東隅の内堀に位置する。調査区の北B-T1、西B-T4で、それぞれが直交する方向の石垣を確認しており、当然、出隅が存在する地点であることは予想された。検出した石垣は、単に1回の曲折ではなく、出隅1(▲F)、入隅1(■G)、3方向の石垣(a、b、c)の確認と、B-T4となす出隅(△H)の位置の想定が出来た。

この調査区で検出した石垣の延べ延長は24.7m。標高3.36mで水面に達するので下部の検出は行なうことが出来なかった。

B-T4-a石垣は、南北方向(N-13.5°-W)で東面する。傾斜角58°を測り、横目路のよく通った打込ハギで築かれている。この石垣は▲E～▲Fの一部で、ほぼ一直線、E・F間の距離81.0mを測る。対面する法面との堀幅は約18mである。

B-T4-b石垣は、東西方向(N-75.0°-E)で南面し、傾斜角55°を測る。積み石の遺存度にバラツキがあり、残りの良い所で標高5.6m、水面上2.2m、石積み6段、悪い所で標高3.8m、水面上0.4m、1段の石積みである。東に▲F、西に■Gがあり、その間の距離21.2mを測る。何のハラミもなく一直線に延びる。打込ハギで築かれている。堀幅は約37mを測り、内堀でも広い幅を持つ。

B-T5-c石垣は、南北方向(N-8.0°-W)で東面し、傾斜角54°を測る。遺存度は悪い。検出部分の長さは約7mではあるが、さらに南へ延び△Hで西へ折れB-T4へ続く、■G～△H間約14.5mを測る。堀幅約39mを測り、最大である。

出隅(▲F)は、石垣面に使用された積み石に比較しても特に大きく110cm×70cm×50cmを測る直方体に近い形をなす。水面下二石までは確認出来たが基底部までは至っていない。わずかなではあるが算木積みで築かれ、傾斜を整えるために合石をたくみにつめている。

入隅(■G)、特に大きな積み石の使用はなく、噛み合せも深くはない。ただ、裏込めだけは厚く、大ぶりの栗石を使用している。

3. B-T6の調査

本調査区は、本丸北東の内堀に位置する。昭和53年度に行なったB-T3の調査で、入隅(■D)が確認されており、これから北へ続く石垣を延べ延長約50mほど検出した。曲折は複雑で、

出隅2 (▲A、▲C)、入隅2 (■B、■D)、5方向の石垣(a～e)を確認した。

B-T6-a石垣は、東西方向で北面する。積み石の遺存も悪く検出した石垣は、水面上1石、わずかに上部を出すもの2石、他は水面下であった。石垣の東は、▲Aで南へ折れる。西側は、直線で延びると、崖面には入り込むので一度北へ折れ、西へ続くものと考えられる。

B-T6-b石垣は、南北方向(N-12.5°-W)で東面する。傾斜角61°を測る。石垣の遺存は、水面(標高3.36m)上、1段から3段、最高所で標高5.0mを測る。検出した石垣の長さは水面上で10.6m、▲A～■B間は12.5mを測り直線で延び、ハラミはない。石積みは、横目地のよく通る打込ハギである。対応する岸までの堀幅は、約27mを測る。

B-T6-c石垣は、東西方向(N-75.0°-E)で北面する。西に■B、東に▲Cがあり、その間は直線で長さ5.1mを測る。傾斜角は58°である。石垣は水面上2段しか遺存せず、下部は、水面下で根石まで調査は至っていない。

特に、石垣の距離が5.1mと短い点が注目される。

B-T6-d石垣は、南北方向(N-13.0°-W)で東面する。遺存度にバラツキがあり、ハラミも著しい。残りの良い所で標高5.8m、水面上2.4m、石積み6段、悪い所で標高3.6m、水面上0.3m、1段の石積みである。北に▲C南に■Dがあり、その間の距離25.9mを測る。ハラミのせい、平面的にも石垣は歪んでいる。打込ハギで築かれている。堀幅は23mを測る。

B-T6-e石垣は、すでに昭和53年度に確認済みである。石垣は、東西方向(N-78.0°-E)で北面する。傾斜角は急で77°を測る。この石垣は、■D～▲E間の一部で、■Dから、東へB-T2を通り42.6m延び▲Eで南へ折れ、B-T1～B-T5-a～▲Fへ続く。ここで、注目されるのは、石垣の傾斜が最も急であるということで、上部遺構との関係が深い。

出隅(▲A)は、B-T6-a、bがなす出隅であるが、隅石は、水面下に存在するので、くわしくは観察出来なかった。

入隅(■B)は、特に大きい石材の使用は認められない。噛み合せもほとんどなく、両方向の石垣のなす角度85°を測る。

出隅(▲C)は、3石を確認。算木積みに見られるような隅石の噛み合せはない。ただ単に同じ大きさの石を積み上げているが、稜線の角度を保つために、石材間に合石をたくみにつめ込んでいる。

入隅(■D)は、これまで確認出来た入隅で最も残りが良い。ここにも、入隅を形成するための特殊な石の使用はない。2方向交互に噛み合うように積んではいるが、深くはない。

4. B-T7の調査

本調査区は、本丸南西の内堀に位置する。調査前から、すでに石垣は露出しており、南北に延びる両側の石垣を追ってみた。検出した石垣は、延べ約59m、出隅(▲K)、入隅(■J)、

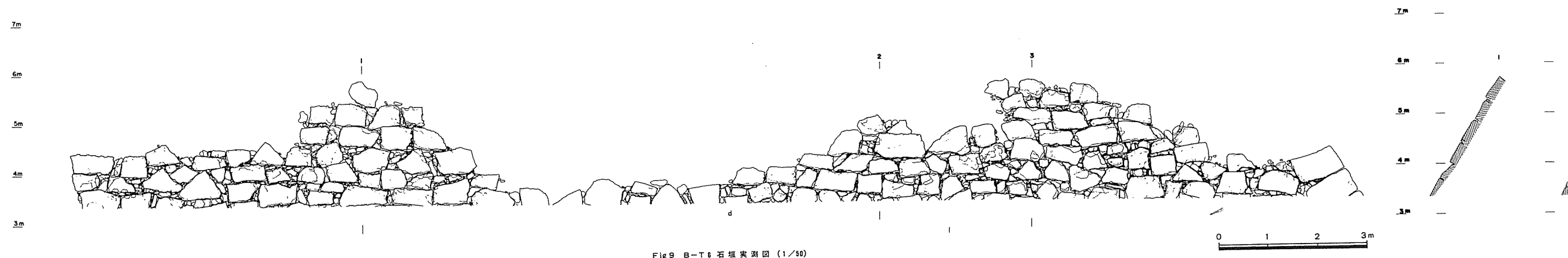
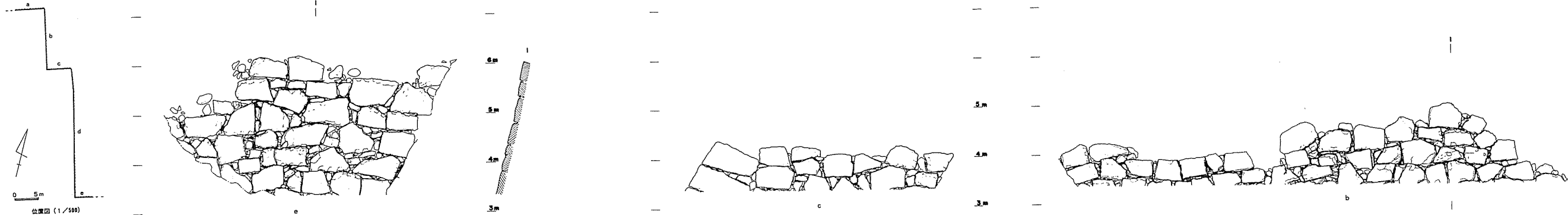
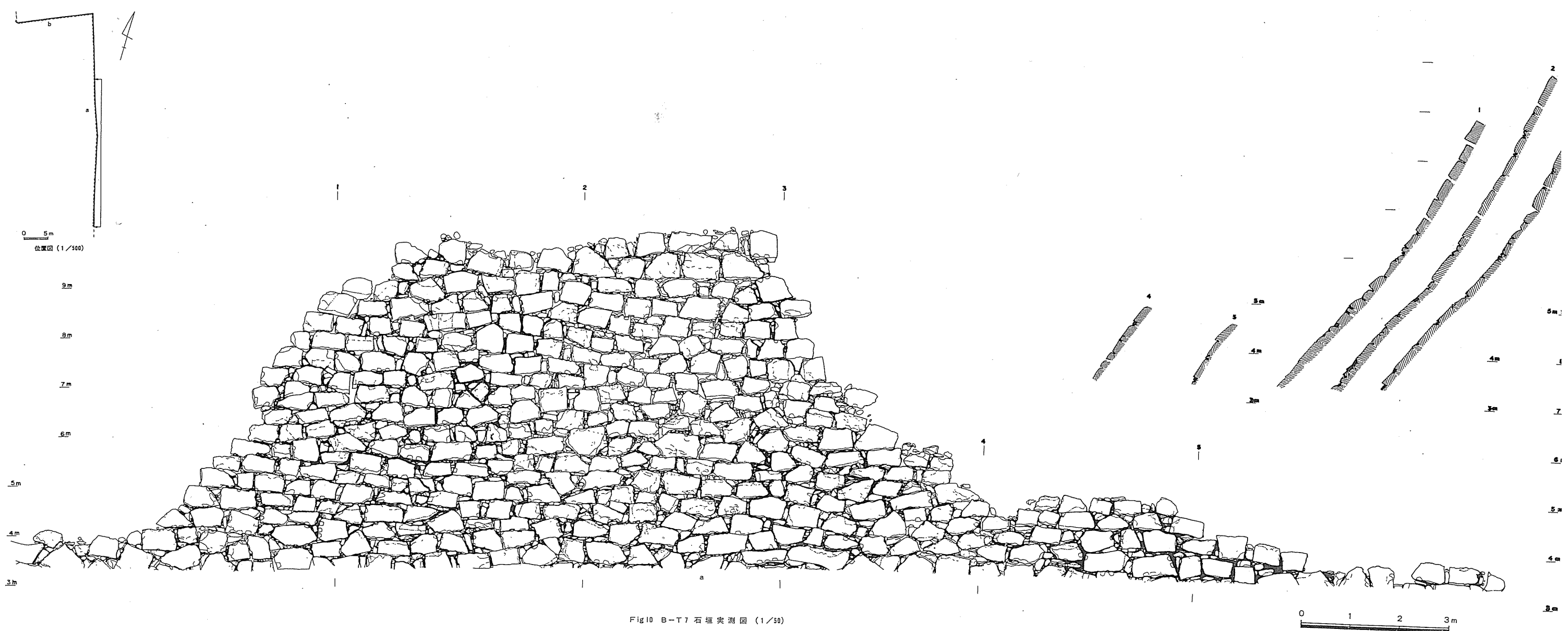


Fig9 B-T6 石垣実測図 (1/50)



と3方向の石垣(a～c)を確認した。

B-T7-a石垣は、南北方向(N-11.5°-W)で西面する。北は■Jで西へ折れbへ続き、南は△Iで東へ折れB-T7'へ続く、この間約54.5mを測り、そのうち北側の約43mを検出した。標高3.36mで水面に達するため下部の調査は行なっていない。石垣の残存にも極端な差があり、悪い所は、水面近く1段の上部がわずかに出ている程度である。良い所は、標高10m水面上6.8mと石垣中最も高く残り石積み18段を数える。断面は、水面から標高5mまでは、面側にわずかに盛り上がるハラミが生じている。これより上部は、わずかな弓状を描いており、全体的には、歪んだ弓状を呈する。傾斜角は、水面上1mまでは51.0°、最上部1m間は66.0°を測る。対岸との堀幅は20～30mである。

B-T7-b石垣は、かなり遺存が悪く、ほとんどが水面の前後である。■Jが近く3段でわずかに良い。東に■J、西に▲Kがあり、長さ16.0mを測る。

B-T7-cは、石垣面の検出はほとんどなく、B-T7-bの西端▲Kで北へ折れる石垣である。

入隅(■J)は、B-T7-a、bがなす。a側3石、b側4石を検出、さほど大きくはない割石を使用し、噛み合せもほとんどない。

出隅(▲K)は、1石の上部だけの検出であり、細部については不明である。

5. B-T7'の調査

本調査区は、B-T7の南に位置する。B-T7-aの続きを確認のために設定し、東西方向の石垣を検出した。石垣の西には、B-T7-aとなす出隅(△I)を想定することができ、東は、B-T8～B-T9を通りB-T4～△Hへ続く。内堀の幅は、現況で考えられていた堀のほぼ中央に石垣を確認したのでかなりせまくなり約13mを測る。

6. B-T8、B-T9の調査

B-T8は、調査区が限定されたため、裏込めの一部と積み石の石尻と思われる部分を確認した。△H～△I石垣の一部である。

B-T9は、内堀を埋める廃棄物が4m以上あり、その下に石垣の一部を確認した。△H～△I石垣の一部であり、東のB-T4、西のB-T8に続く。

Ⅳ おわりに

本年度は、本丸においてA-T8、A-T11、内堀においては、B-T4～B-T9の調査を実施したが、今回までの調査を含め出土遺物については、本概報でも報告することが出来なかった。以下、調査の成果について簡単に整理しておく。

遺構について

①礎石建物跡。宇土城の全体、あるいは部分を示す古図や建物などの記録がないので、直接的に建物を推定するには難がある。そこで、礎石等の配置がよく似た熊本城不開門を比較の対象とした。

まず第一に、両建物とも本丸の北東部に位置する。不開門は、北東すなわち^{うしろ}丑寅の方角にあり、鬼門とされ通常の出入には使用されてはいなかったらしい。『肥後宇土軍記』に……本丸之虎口貳ヶ所大手へ出ル口ハ北東之間ニ明たり……とあり、この建物跡の方角に該当する。次に、城門、門内、門外に分け各部分の比較を試みた。城門は、基礎施設の比較である。両建物とも、床面のレベルは、周囲よりも背丈以上低くなる凹地に立地する。入口には一段の石列が並び、左右には石垣を有し、共に、左側壁に沿って排水溝がある。また、礎石の配置もほぼ同じであり、扉部分の柱間3.32m（宇土城）3.28m（不開門）、控の柱間2.70m、3.70mをそれぞれ測る。このように、形・規模がほぼ同じであり、各部分にも多くの共通点がある。平面形もほぼ一致しており、現段階で上部構造を考えるには、不開門が櫓門であるように、この建物の上部構造も同型もしくは、これに類似する櫓門であったとするのが妥当であろう。また門の内側は、この門が直線的に通過するのに対し、不開門は右へ折れる。門外は、不開門は門を出るとまず右、次に左へと、それぞれ直角に折れ、右方向へ大きくカーブを描きながら本丸外へ出る。この門の場合は、右へ直角に折れ、石段最上部と思われる石材が残るが、その先は遺存しない。しかし、B-T6-e石垣の傾斜角が急であることが石垣の高さを制限しているならば、この石垣に沿って東へ延び、本丸外へ出る通路が考え

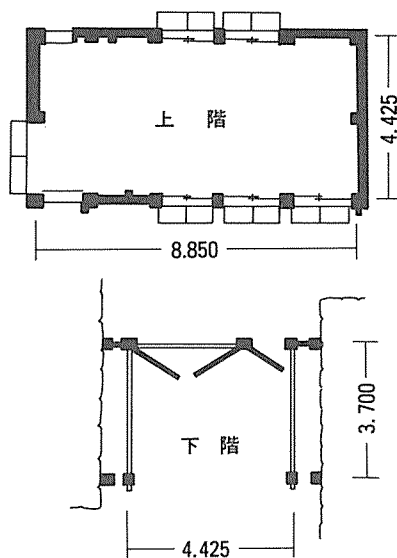


Fig 11 熊本城不開門平面図（1/200）

（毎日新聞社、『重要文化財』16建造物Ⅴ、p114、1975、より作成）

られる。

このように、門内外の様子には差異が認められるが、基本的には同様式を程するものと考えられ、通路の差はそれぞれの城郭の縄張の特徴と考えたい。

②排水溝。本丸南西で検出した石組の排水溝は、直下のB-T7-a石垣とほぼ直角の位置にあり、傾斜も西側で急に増す。これは、近世城郭などに通例みられるような石垣天端より、少し下方に排水口を設け、本丸から内堀へ排水を行なう施設であろう。

③石垣(本丸の平面形)。これまでに確認した石垣は、延べ163mこれによって復原可能な範囲が、全体の約7割に達した。出隅7箇所(未確認2)、入隅4箇所を確認、東西幅148m、南北幅132mを測る。

本丸は、東西南北にほぼ平行($8^{\circ}\sim 15^{\circ}$ の振れ)、基本的には方形をなす縄張である。未確認の北西隅を除けば、隅部に1または2箇所の入隅を設け屈曲をつけている。塁の長さにも変化があり、最も短い5.1m、長い100m以上(推定:確認部分はE F間の81m)と極短な差がある。さらに傾斜角にも変化($54^{\circ}\sim 78^{\circ}$)をもち、場所によっては著しく増すところもあり、上部施設の関係と考えられる。断面形についてみれば、最も残りのよいB-T7-a石垣が高さ6.7mを測り、断面形が弓状をなすことは容易に識別出来るが、ハラミが生じていて正確な値を知るに至っていない。積方は打込ハギであり、石垣全体の反りを揃えるために、横目地をほぼ水平にし、精巧である。

このように本丸は、複雑ではないが、塁に屈曲を持ち、発達した石垣と幅の広い水堀は城を堅固にしており、近世城郭の特徴を十分に備えている。

時期について

今年度検出の遺構は、すべて同一時期で、宇土城の最も新しい城郭の一部である。調査概報(I)で指摘したように、従来から宇土城は小西行長の居城とされてきたが、本丸には約2mほどの盛土があり、小西時代の遺構・遺物は盛土の下層から出土するので、現地形を含め、上層の築城者は関ヶ原以後、肥後一円を領した加藤清正と考えられる。

『肥後宇土軍記』には、……宇土之城縄張等清正之心ニ不相應之所有之由ニて毎歳方々普請有之後ハ丈夫に罷成候已後ハ隠居所に可被致との取沙汰也……の記録がある。さらに検出した遺構が清正築城の代表にされる熊本城に共通する部分が多くみられるのも、清正普請を証左する一要素ではないだろうか。

さらに、清正普請の時期を考えるならば、熊本城完成の慶長12年(1607)以降、あるいは、宇土城出土の軒平瓦「慶長十三年八月吉日」銘が示す年代が妥当であろう。

しかし、これらの中には、推察の域を脱しない部分もあり、今後十分な検訂を加えなければ